

# 工部大学校書房の研究(3)

滝沢正順

Library of Kobu-Dai-Gakko (Imperial College of Engineering, Tokei) (3),  
by Masanori Takizawa.

## 目 次

1. はじめに
2. 工部大学校の資料
3. 工部大学校について
4. 書房について
5. 書房の規則
6. 書房の職員
7. 藏書と書籍目録  
(以下 本号)
8. 帝国大学工科大学の書房
9. 書房撤廃以後の工科大学
10. その後の工部大学校校舎

## 8. 帝国大学工科大学の書房

明治19年3月1日の帝国大学令公布以後の帝国大学工科大学の書房についてみてみよう。帝国大学の詳しい概要を知ることができる資料としては『帝国大学一覧』があるので、ここではまず毎年度の『帝国大学一覧』を順次みていき、その後それを補足するという形をとることにする。

最初の『帝国大学一覧』である『帝国大学一覧・明治19/20年』の「第2章・組織」に

帝国大学ハ工科大学ヲ除キ本学事務所図書館法科大学医科大学文科大学理科大学及医科大学附属医院ヲ本郷区元富士町ニ設置シ工科大学ハ漸ク其新築ニ着手シタルヲ以テ當分虎門内旧工部大学校跡ニ設置ス<sup>10</sup>とあるように、はじめは虎の門のもと工部大学校の校舎がそのまま工科大学の校舎として使用されていた。

このとき帝国大学図書館は、「図書館規則」第1条に、「帝国大学図書館ハ大学院及ヒ分科大学ノ図書ヲ貯蔵ス

ル所トス<sup>11</sup>とあるように帝国大学全体の図書を「貯蔵」するところとされていたが、実際には2か所に分かれていた。『帝国大学一覧・明治19/20年』の「第12章・図書館」に

帝国大学図書館ハ未タ其建築ニ着手セサルヲ以テ法科及文科大学ノ用ニ供セン為メ新築シタル家屋ノ二階ヲ仮用シテ図書ヲ貯蔵シ及閲覧スルノ所トス工科大学所属ノ図書ヲ分ツテ該大学中堂ノ上廊ニ排列シ閲覧ニ供ス

図書館所蔵ノ図書ハ合計凡十八万冊ニシテ其内工科大学ニ分属スルモノ凡二万冊アリ購買寄贈又ハ交換ニ依リ専ラ海外ヨリ送着スル所ノ図書其数少カラス図書館ノ藏書年ヲ逐フテ大ニ増加スヘシ<sup>12</sup>

とある。

また「第7章・工科大学」には  
本学中堂ニ帝国大学図書館分館ヲ置キ本学所属ノ図書ヲ貯蔵シ閲覧室ヲ設ケ教員及学生ニ図書閲覧ノ便ヲ與ヘ<sup>13</sup>

とある。

以上のなかの冊数に関する部分は文部省編『近世教育概覧』(明治19年)も同じ数字をあげている。<sup>14</sup>

次の年度のものである『帝国大学一覧・明治20/21年』では、「第2章・沿革及組織」「第11章・図書館」「第7章・工科大学」に、それぞれ上に引用したのと同じ文章が載っている。また附録として収録されている、明治20年7月9日の帝国大学卒業證書授与式の際の帝国大学総長(渡辺洪基)の演説のうちの、工科大学について述べた部分のなかに

書房ニ電気燈ヲ点シ工学実驗室ヲ整頓スル等其改良ノ事項甚タ勘カラス<sup>15</sup>

とあって、工科大学におかれた図書館分館が、工学寮・工部大学校のときと同様、書房と呼ばれていたことがわかる。

1988年3月12日受理

たきざわ まさのり 東京大学工学部機械系図書室

Nov. 1988

さて、本郷に建築されていた辰野金吾設計の工科大学の建物は、明治21年には完成し、工科大学は7月31日虎の門から移転した。

そして工科大学所属の図書は、虎の門時代と同じく工科大学に独立して置かれていた。

『帝国大学一覧・明治21/22年』の「第12章・図書館」には工科大学の図書が本館と分かれていることや、その冊数が約2万冊であることを述べた文章が消えてしまつておらず、帝国大学図書館は単一であるような印象を受ける。しかし「第7章・工科大学」には

本学内別ニ書房ヲ置キ本学所属ノ図書ヲ貯シ閱覧室ヲ設ケ教員及学生ニ図書閱覧ノ便ヲ與フ<sup>150</sup>  
と記されており、依然として工科大学が独自に書房を設けていたことがわかる。

『帝国大学一覧・明治21/22年』の「工科大学」の章と同じ文章は、『帝国大学一覧・明治22/23年』の「工科大学」の章にもある。そして、「図書館」の章にはやはり工科大学のことは特別には記されていない。

なお、付記しておくと、工部大学校のときにあった博物場の建物は、工科大学の虎の門時代にはそのまま博物館として使用されていたが、工科大学が本郷に移転した際に廃止された。これについて、明治22年7月10日の帝国大学卒業證書授与式のときの帝国大学総長(渡辺洪基)の演説のなかの工科大学について述べた部分に

從來ノ博物館ヲ廢シ其標本模型及器械類ハ之ヲ各教室ニ配置スルコト、セリ蓋シ此変更ニヨリ授業上便益ヲ得タルコト頗ル大ナリ<sup>151</sup>

とされている。このことは『文部省年報』にもほぼ同じ文が記載されている。<sup>152</sup> 図書については各学科に分けない方が有効だと（この時期には）考えられたのだろう。

さて、『帝国大学一覧』の「明治23/24年」「明治24/25年」「明治25/26年」をみると、そのどれにも工科大学の書房の記述は全くくなっている。

以上の『帝国大学一覧』における工科大学書房についての記載の有無をまとめると表9のようになる。

表9『帝国大学一覧』の工科大学書房の記載

	図書館の章	工科大学の章
明治19/20年	○	○
明治20/21年	○	○
明治21/22年	×	○
明治22/23年	×	○
明治23/24年以降	×	×

『帝国大学一覧』の英文版である“Imperial University of Japan. The Calendar.”での、図書館分館・

滝沢：工部大学校書房の研究(3)

書房の記載もみておくことにしよう。帝国大学の最初の2年度である‘1886—87’‘1887—88’年度版には和文の一覧と同じように、‘College of Engineering’と‘Library’の両方の章に図書館分館の記載があり、‘1888—89’年度版からは‘College of Engineering’の方にだけ記載がある。そして‘College of Engineering’の方の記載は、和文の一覧の場合より2年度あとの‘1891—92’(明治24—25)年度まで続いている。

‘College of Engineering’の章では、branch of the University Library が、工科大学の side galleries of the Central Hall (‘1886—87’‘1887—88’年度版), もしくは, Hall of the College (‘1888—89’年度版から‘1891—92’年度版まで) にあり、そして虎の門時代のにも本郷に移ったあとのにも(記載のある全期間を通して同じに), 工科大学書房には, professors and students のための two reading-rooms が置かれていると書かれている。また, ‘1887—88’年度版には工科大学 hall に電灯があつて晩にも開いているとなつてている。本郷移転後は,(帝国大学の) Main University Library and its branch に, ‘1888—89’‘1889—90’年度版には近いうちに, ‘1890—91’‘1891—92’年度版にはすでに電灯があることがそれぞれ記されているが、これは工科大学が電灯の設備に関係しているためのようである。

ところで、建築に着手されていた帝国大学図書館の建物は、明治25年8月18日に竣工し、翌明治26年7月5日、図書館はこの建物に移転した。<sup>153</sup> そしてこの時に工科大学の蔵書は、法科文科大学の建物内にあった帝国大学図書館の蔵書とともに、新しい図書館に移された。<sup>154</sup> 高野彰氏の「帝国大学図書館史」は、「(明治26年) 6月30日には工科大学の蔵書が新築の図書館に移されるとともに、この日をもって工科大学書房掛は廃止されることになった」と記している。

つまりこの明治26年6月30日が、工学寮・工部大学校・帝国大学工科大学と約20年間続いた「書房」の歴史の終わった日であるということになる。

さて、工科大学書房の詳しい蔵書数は『帝国大学年報』の「図書増減」の部分によって知ることができる。表にしてみよう(表10)。表10の合計冊数はその年末の数で、右にある増減や移動のあった後の数である。明治20年と21年の本館からの移動冊数は、工科大学書房の増加冊数全体のなかに含まれているのが計算してみるとわかる。しかし22年については冊数の計算内容がよくわからない。明治20~22年の『帝国大学年報』の「図書増減」の部分には、工科大学の図書についての詳細は工科大学申報に

表10 帝国大学工科大学書房蔵書冊数

	合計	増減内訳(冊)		本館との移動(冊)	
		増	減	本館から	本館へ
明治19年	16,643冊				洋書1,227
明治20年	18,297冊	洋書890, 和漢書812	洋書48	洋書26	
明治21年	19,434冊	洋書906, 和漢書240	洋書 9	洋書 3, 和漢書 3	
明治22年	19,890冊	洋書840, 和漢書82	洋書 4, 和漢書 1	洋書85, 和漢書204	
明治23年	本館冊数に合算				

記してあると書かれている。しかし残念ながら、参照できた『帝国大学年報』には各分科大学(長)申報と専監申報の本文が欠けていて見ることができない(目次にはある)。明治23年の『帝国大学年報』では、工科大学書房の図書を本館の蔵書に合算したことだけが記されていて、書房だけの蔵書数は述べられていない。24年以降は工科大学や書房のことは「図書増減」には全く出てこない。

『帝国大学年報』で書房の蔵書数が明治23年から記されることは、先に見た和文の『帝国大学一覧』で、「明治23/24年」から書房についての記載がなくなると符合している。どちらも明治23年というのは、ことによると単なる偶然かもしれない(偶然でないかもしれない)。しかし工科大学書房が独立した図書館としての立場を弱めていき、ついには廃止されて、蔵書が本館に統合されることになる過程の一端があらわれたのだということはいえるように思われる。

なお、『帝国大学年報』での帝国大学図書館の蔵書数は、明治23年から統一されたということにはならない。というのは、今度はこの明治23年に新しく設置された農科学の蔵書数が「図書増減」の部分に別記されているからである。

農科学の蔵書数の別記は、『文部省第18年報』(明治23年)でも同様である。「第2篇・全国教育」の「書籍館」のところにある、帝国大学図書館の蔵書数が記載された箇所を引用してみよう。そこには工科大学書房の名も出てくる。

帝国大学図書館ハ和漢書一万四千三百十一部洋書五万四千三百八十七部計六万八千九百十八部ヲ藏ス之ヲ前年ノ藏書部数ニ比シ一万四千二百五十七部ヲ増スモノハ主トシテ工科大学書房ノ図書ヲ本館ノ藏書ニ合算セシニ由ル此他農科学ニ和漢書九千三百十八冊洋書四千六百四十五冊アリ是亦漸次本館ノ書目中ニ編入セントス<sup>四</sup>

『文部省年報』では、他の年度には工科大学書房のことは出てこない。たとえば『文部省第19年報』(明治24年)の「第2篇・全国教育」の「図書館」(この「第19年報」

から項目名に使われる語が「書籍館」でなく「図書館」に変わる<sup>四</sup>のところには、帝国大学図書館の蔵書数や、「印刷目録ノ件名索引ヲ編纂スルコトニ著手」したが「此事タルヤ実ニ創始ノ業ニ属シ種々ノ困難アリテ未タ其成功ヲ見ルニ至ラス」ということ、それに農科学の蔵書数のことはある<sup>四</sup>が、工科大学のことはない。同じ「第19年報」の第2篇の「帝国大学」にも、工科大学には標本器品を備え、別に図画室と実験場があることを記すのみで、書房のことは出てこない。「第17年報」以前や「第20年報」以後も同じである。

帝国大学工科大学の蔵書に押されている印と、工科大学書房の蔵書票について述べておくと、印は

(1) 「帝国大学 / 図書之印」

(大・正方形) 縦7.8cm×横7.8cm

(2) 「工科大学管理」

(小・長方形・縦長) 縦2.4cm×横0.8cm

がある。(2) の印は、工学寮・工部大学校の蔵書の印の(5)(6)と同じ大きさである。(2) の印は本文のページの余白にも押されているが、標題紙には必ず押されていて、この点は工学寮・工部大学校の蔵書の印の(5)(6)とは相違している。

蔵書票は

(1) 「工科大学書房 / LIBRARY / OF THE / ENGINEERING COLLEGE / (Kokwa-dai-gaku) / OF THE / IMPERIAL UNIVERSITY OF JAPAN, / TOKYO.」

右下に“Case”“Shelf”。蔓草模様の枠線がある。

枠模様の中央の線の四角形、縦5.5cm×横6.6cm。

用紙の大きさの一例、縦6.4cm×横7.4cm。

(2) (1)と同じ図柄だが、工科大学のローマ字表示の部分が大文字の(KOKWA-DAI-GAKU)になっている。また、全体の大きさが(1)よりすこし大きい。枠模様の中央の線の四角形、縦6.4cm×横8.3cm。用紙の大きさの一例、縦7.8cm×横9.8cm。

工科大学の蔵書票は、学校名とその行数等は異なるもの

Nov. 1988

の、工部大学校の蔵書票の（4）～（7）とよく似た図柄である。

一部分の本には、“Gen. Library. / No.” の紙が貼られている。

また、筆者は未見だが、天野敬太郎編『日本書誌の書誌・総載編』(巖南堂書店、昭和48年)には、明治19年の工科大学書房の目録が記されている。<sup>10</sup> 同書に東京帝国大学とあるのは帝国大学の誤りと思うが、記載は次のようにある。

Catalogue of books in the Library of the Engineering College (Kokwa Daigaku) of the Imperial University of Japan, Tokyo.

東京：東京帝国大学工科大学編・刊 明19(1886)  
この目録のあとには、現在までの1世紀の間、東大工学部全体としての蔵書目録は発行されていないようである。

## 9. 書房掛廃止以後の工科大学

工科大学から書房と書房掛がなくなったあと、工科大学（およびその後の工学部）<sup>11</sup>では、図書をどのようにしたのだろうか。明治期と大正初期を中心にみて、その後についても、若干言及することにする。

ところで、新制大学以前には大学の数は現在よりもるかに少なかったが、工学系の大学・学部の数もかなり限定されたものだったことを、はじめに確認しておきたいと思う。<sup>12</sup> 明治10年には工部大学校と東京大学理学部の一部（工学系学科）の2校であったのが、合併して明治19年に帝国大学工科大学1校になったわけだが、その後、明治時代には、京都帝国大学理工科大学（明治30年）と九州帝国大学工科大学（明治44年）が新しくできただけである。<sup>13</sup> その後順次に数は増え、とくに昭和になってからの昇格・新設で多くはなったが、それでも第2次世界大戦終了時の昭和20年で13校にすぎない。<sup>14</sup> 13校の内訳は帝国大学7、官立単科大学1、私立総合大学3、私立単科大学2である。

さて、(東京)帝国大学工科大学では、書房掛廃止後は学科ごとに図書や雑誌を管理し、工科大学（工学部）全体の図書を集中することはなかった。そして、蔵書の増加と学生数の増加とともに、学科ごとの図書室が整備されていくことになった。現在筆者にわかるところでは、東京帝国大学になってからの明治30年代が学科図書室を確認できる上限である。しかし工科大学に書房のあった時期から、すでに各教室（学科）にもかなりの数の図書が置かれていた可能性は、十分考えられる。<sup>15</sup>

また、書房の廃止された明治26年は、いうまでもなく

滝沢：工部大学校書房の研究(3)

帝国大学に講座制のしかれた年である。東京帝大で講座が研究教育予算をもつようになったのが、文章としてあらわれるのは大正期になってからであるが、<sup>16</sup> 図書の利用・管理・購入に関して、図書館・室や教官・学生個人のほかに講座という要素が加わることになる基盤はこの明治26年から始まっているわけである。

学科の図書室であると個々の規模には制約が生じるが、学生や教員にとって資料面で不備であるとばかりは必ずしもいえない。理工大学の例だが、明治38年に東京帝国大学化学科に入学した小倉金之助（數学者）は、「入学してから約半年間について、「私は実験ばかりではなく、（化学科）図書室の中でも時を送るようにしたのです。そこにはファント・ホップやオストワルドなどの代表作をはじめ、多年の間その名ばかりを聞いていた化学書や化学雑誌が、部屋いっぱいに排列されているではありませんか。」「図書室にはきわめて多くの欧文の図書雑誌が満ちており、暇あるごとにそこに入って、ドイツ語の『物理化学雑誌』などを拾い読みした嬉しさは、ただいまでも忘れられません。」と回想している。

工科大学にもどると、たとえば、電気工学科では、明治30年代の初め、工科大学本館の1階に図書室があった。<sup>17</sup> また大正初期にもやはり工科大学本館のなかに建築・機械工学科とともに電気工学科があり、その当時の電気工学科図書室は次のようにあったという。

図書室は書庫兼閲覧室、事務室等を兼ねた二室で計二十二坪位、学生は閲覧机の後にある書棚から自由に図書、雑誌を引出して、用が済んだら元へ戻して置くやり方であった。<sup>18</sup>

工科大学では本館以外にも建物がだんだんと新築されていったのであるが、明治36年に竣工した造船学科・造兵学科の建物(2階建。総建坪360坪。この建物は翌37年造兵学科の教室から出火して土木学科の建物とともに焼失した。)の平面図<sup>19</sup>をみると、

1階に

造兵学科図書閲覧室 (9坪)

2階に

造船学科図書室 (20坪)

同 教員図書閲覧室 (10坪)

同 学生図書閲覧室 (7坪)

と4室（合計46坪）の図書関係の部屋がある。造船学科の場合、この建物ができたときの教職員<sup>20</sup>は、

教員 6 (専任教授2, 外国教師1, 講師1, 助教授2)

助手 1

小使 3

なので、この時期の造船学科は、1名いた助手が図書室関係の仕事もおこなっていたのかもしれない。

機械工学科では、学科に受け入れた本を日付順に記していく帳簿で、明治33年10月から明治44年6月までが書かれたものが、残っているなかでは一番古い。また、明治44年9月からの年度に機械工学科の図書室専任の職員が1名<sup>10</sup>、大正元年9月からの年度には同じく2名<sup>11</sup>いる。明治39年9月～40年8月の年度の個人別の室外貸出ノートを見ると、返却された本には職員のものと思われる返却済みの印が押されている。もっとも専任か兼任かはわからない。そして運営は、古い時期には学生が自分で書棚から本を取り出す形をとったこともあったが、明治末・大正初期には「図書棚室には図書係のみ出入りし、学生は図書目録に挿り借用證を認めて提出し、係員は其書を学生に渡す」という方式で運営されていた。運営について大正2年9月の機械学会（のち日本機械学会）の会で、東京帝大機械工学科のある教官は、他の学校の機械工学科教員などに対して、「図書室は（学生に）出来るだけ寛大な方法を探つてをるつもりであります、なるべく開放してやって居ります」と発言したりしている。

また、明治42年の土木工学科図書室の写真<sup>12</sup>を見ると、1つの部屋のなかが閲覧席の部分と書庫の部分とに低い仕切りで区切られている。閲覧席は学生が多くいるのに書庫にはまったく人影がなく閉架式のようであり、閲覧席の向こうには図書室職員らしい机にむかった男性の姿がみえている。

以上、時期がすこし前後しているが、東京帝国大学の工科大学では明治30年代初めにはすでに学科に図書室があり、学科によって事情は異なるだろうが、遅くとも明治末には専任の図書室担当職員がいたところもあり、学科ごとにそれぞれ独立した図書室運営がおこなわれていたということになる。

ところで大正12年には関東大震災があって、よく知られているように、東京帝国大学附属図書館は焼失する。関東大震災のときには工学部本館の建物も被災し、図書も被害を受けた。

#### 書籍焼失御届

大正十二年九月一日震災ノ為メ別紙

記載ノ書籍焼失致シ候間及御届候也

大正十二年十二月十五日

工学部機械工学科教室

主任 内丸最一郎

図書館長 姉崎正治殿

さて、図書室が学科単位であることによって規模や予

算に制約が生じるのは、同じ形態であればどの大学・学部でもある程度類似した状態になるのではないだろうか。たとえば、現在、国内の旧帝国大学7校の工学部と理学部のなかには、学部でなく学科単位の図書室のところが東京大学以外にもあるようであるが、『園研究』第6卷3号（昭和8年）に、東京工業大学附属図書館の調査と東京帝国大学農学部図書室報告による「各大学及研究所ニ於ケル昭和6及7年度図書費一覧」が載っていて、学科単位の図書費が一部出ている。この一覧に出ているのは官立の自然科学系学部・大学が中心で、経常費が図書・雑誌・製本に分けて掲載されている。この一覧の中で、東北・東京・京都・九州の各帝国大学の工学部は学科単位である。もっとも、その帝大の工学部の全学科が載っているわけではなく、たとえば東京帝国大学の工学部では機械・電気・建築の3学科だけしか載っていない。図書費だけでなく、講座数や学生数の相違等も考えなければ意味はないわけだが、この一覧にみられる範囲では、全般的にみて、学科ごとの図書費（全体）については、どの帝国大学でもそれほど極端な相違はないといつていよいに思われる。

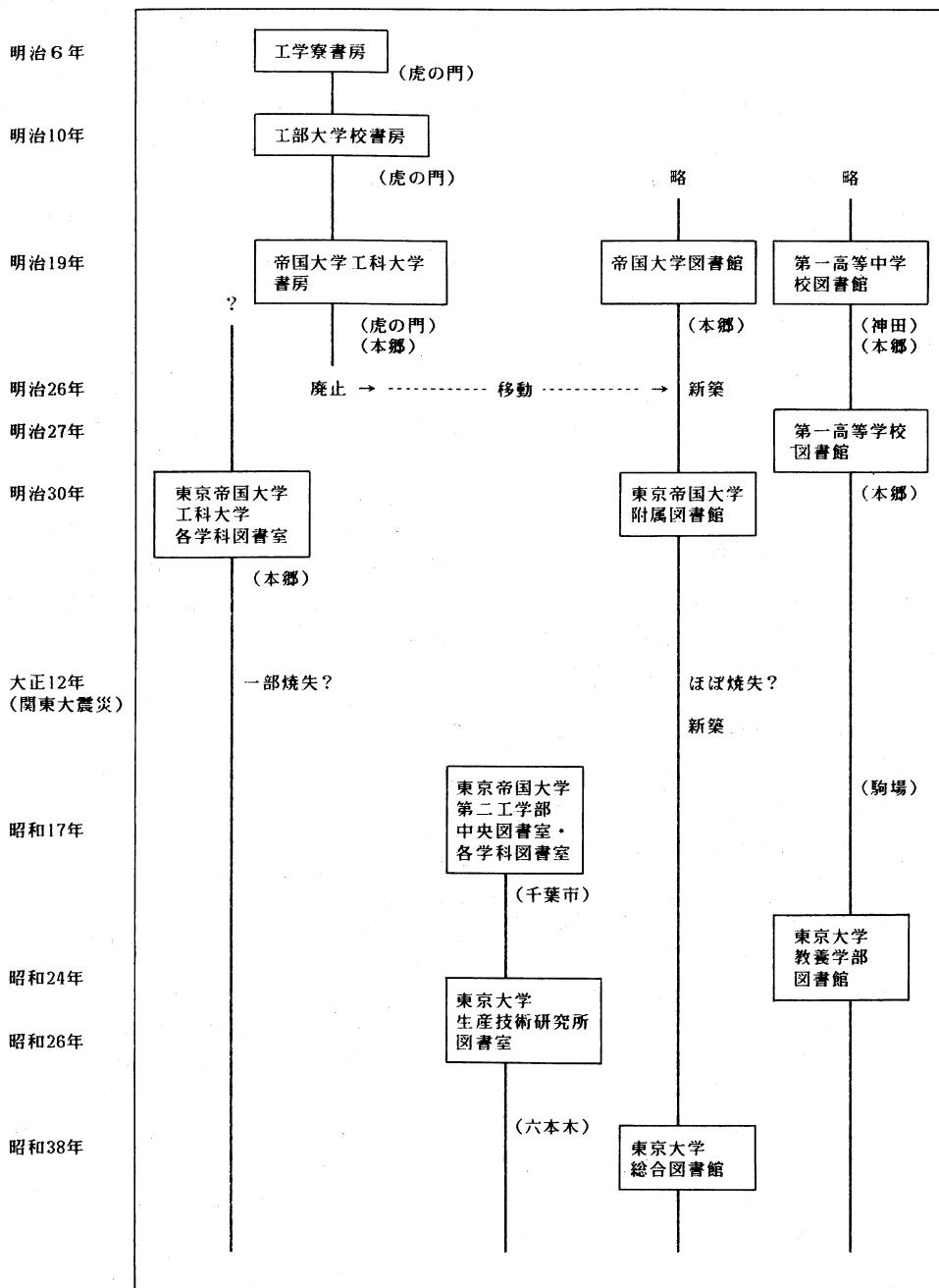
なお、東京帝国大学には、第2次世界大戦中の昭和17年に第二工学部が千葉市郊外に新しく設置され、それにともなって従来の工学部は第一工学部となった。第二工学部はこの当時工学部としては日本最大の規模をもっていた。この第二工学部には中央事務室に図書掛（中央図書室）があり、また「各教室にはそれぞれ所属の図書室があり専門図書を収蔵していたが、これはすべて中央図書室備付図書の公用貸出の形式で配置されていた。中央図書室には、科学一般書、工学工業に関する一般書、教養図書、辞典類、工学関係バックナンバーを收め<sup>13</sup>」ていたという。そして「実際の事務は、中央事務室の3～4名の図書掛員と、各学科事務室の1名位の図書担当者がこれに当たった」という。

第二工学部は戦後の昭和26年に閉学し（その後身が現在の東京大学生産技術研究所）、東京本郷の第一工学部はもとの名称である単なる工学部へと戻った。

さて、本稿でこれまで述べてきた、工学寮・工部大学校書房とそれに直接・間接に関連がある図書館（室）について図にしてみよう（図1）。図1で、括弧のなかは所在地。「移動」「焼失」は工学寮・工部大学校旧蔵書についてである。明治19年以後で学校名・学部名のみの変更は記載を省略しているものがある。第二工学部と生産技術研究所は昭和24～26年の間は並設されていた。

工学寮・工部大学校の旧蔵書の現存するものは、東京

図1 工学寮・工部大学校書房と関連図書館・室



大学内の図書館・室が所蔵しているものが最も多いだろうと思われる。それ以外では、内閣文庫が所蔵しているものは同文庫の蔵書目録に表示がある。<sup>130</sup>

東京大学教養学部図書館所蔵のものは、大学予備門・第一高等中学校の系統に、工科大学予科（実質は工部大

学校予科）が統合された関係から旧蔵書の一部が移管されたものだろうか。<sup>131</sup>なお、第一高等学校図書館の蔵書は関東大震災のときも無事だったという。<sup>132</sup>

第二工学部新設のとき東京・本郷の（第一）工学部から移管された図書のなかには工学寮・工部大学校旧蔵書

もふくまれているのではないかと思われる。第二工学部へ移された本について、(第一)工学部機械工学科からの例<sup>145)</sup>を示すと、工学寮・工部大学校の外国人教師たちの来日に関係のあったグラスゴー大学のランキン教授(William John Macquorn Rankine)の“A Manual of Applied Mechanics”はもと5冊あった。発行年でいうと1872, '76, '82, 1901, '08年で、このうち1876, 1901年の2冊が第二工学部に移された。本郷に残ったうちの1872年のには工学寮の、1882年のには工部大学校の印が押されている。

東京大学総合図書館所蔵のランキンの著書などのなかには、工学寮・工部大学校の旧蔵書があるが、震災後の図書館復興時に工学部から移管されたものもあるのかもしれない。また総合図書館所蔵の図書に、工学寮・工部大学校で成績優良の生徒に実際に与えた賞品の本が見つかるることはすでに述べた。<sup>146)</sup>

## 10. その後の工部大学校校舎

さて最後に工部大学校の建物がどうなったかについて述べておこう。これはつまり、日本で最初の工学専門の大学図書館のあった建物がどうなったかということである。

工科大学が本郷に移ったとともに、宮内省の所管となつた敷地に、もと工部大学校の校舎や建物はそのまま残っていた。そして学習院・東京女学館の校舎、帝室博物館の倉庫、宮内省図書寮、維新史料編纂事務局<sup>147)</sup>というように、いろいろな機関に使用された。<sup>148)</sup>工学会の大著『明治工業史』の建築篇が本館の建物について、「明治末年には殆ど不用に帰し、僅に物置として用ひられたる」と記すのは、帝室博物館の倉庫として使用されたことのようである。しかしこれらの建物が、工学寮・工部大学校のあったところだということは、一般的の印象にあったようである。<sup>149)</sup>

ところで、東京書籍館の館長補だった永井久一郎が工学寮に勤めたことがあるのを、「書房の職員」のところで記した。彼の長男は小説家の永井荷風であるが、永井荷風は明治10年頃の小林清親の絵と比較して、隨筆「日和下駄」のなかで東京市内を次のようにいっている。これは大正3年発表の部分である。

今日東京市中に於て小林(清親)翁の東京名所絵と参照して僅に其の当時の光景を保つものを求めたならば、虎の門に残つてゐる旧工学寮の煉瓦造、九段坂上の燈明台、日本銀行前なる常盤橋其の他数箇所に過ぎまい。<sup>150)</sup>

また建築学者の大熊喜邦は、大正12年に雑誌『建築世界』に連載した「明治建築史料」の其3・4<sup>151)</sup>に旧工部大学校の生徒館・作工場・左翼教場・校堂の設計図と仕様書を掲載している。そして、「今猶ほ明治初期の西洋建築の遺例として虎の門内に其の昔ながらの面影を伝へてゐる」と書いている。ところがこの文章の載った『建築世界』が発行されておよそ半年後の9月に関東大震災が東京を襲つた。そして大震災によって旧工部大学校の建物は被災してしまつた。約10年間にわたつて書房のあった本館の建物は震災からしばらくして、海軍工兵隊の手によつて爆破された。<sup>152)</sup>

現在は、旧工部大学校の建物はあとかたもなく、その場所には文部省や会計検査院の庁舎が建つてゐる。<sup>153)</sup>ただひとつ昔をしのべるものとして、工部大学校の建物の煉瓦・石材・銅材などを使用してつくられた記念塔<sup>154)</sup>を、会計検査院通用口の脇に私達は見ることができます。

本稿における資料に関して、東京大学史史料室の中野実氏、東京大学工学部沿革資料室の山口元子氏にお世話をになりました。東京大学工学部図書掛長菅野精子氏(工学部中央図書室)にも資料に関する便宜をいただきました。この場を借りてお礼申しあげます。

## 注

- 145) 『帝国大学一覧・明治19/20年』 p. 3
- 146) 同上書 p. 123
- 147) 同上書 p. 122-123
- 148) 同上書 p. 80
- 149) p. 94
- 150) 『帝国大学一覧・明治20/21年』 p. 294。『帝国大学第2年報』(明治20年)にも載つてゐる。
- 151) 『帝国大学一覧・明治21/22年』 p. 133
- 152) 『帝国大学一覧・明治22/23年』 p. 342
- 153) 『文部省第17年報』(明治22年) p. 44

なお、この工科大学各学科の列品室内の写真が、小川一真編の写真集『東京帝国大学』に出てゐる。小川写真製版所、明治33年。増訂版が明治37年。

また、『帝国大学第2年報』(明治20年)に出てゐる数字では、明治20年のときで、博物場にあるものより各教室(学科)に置かれている器械等の方が数の点ではずっと多い。図書の場合にも、書房と各教室(学科)とで同じような状況にあつたかもしれない。「工科大学博物場ニ陳列スル各学科ノ標本等壹萬九千參百九拾貳同学各教室ニ分置スル器械貳萬七千五百八拾九器具壹千四百四拾貳標品拾參標本壹萬四千三百貳拾五模型貳百拾」

- 154) 『帝国大学一覧』の「沿革略」による。「明治26/27年」「明治27/28年」のどちらもp. 10-11

Nov. 1988

- 155) 『東京帝国大学五十年史』下冊 p. 1104—1105  
156) 高野彰「帝國大学図書館史(2)」「図書館界」Vol. 29 No. 4, 1977年, p. 165  
157) p. 64  
158) この『文部省年報』での名称の変化にはふれておられないが、たとえば、岩猿敏生「書籍館」から「図書館」へ、「図書館界」, Vol. 35 No. 4, 1983年11月, p. 195—198  
159) p. 52。印刷目録の編纂については、第5年報(明治23年)以降の『帝國大学年報』に毎年記載があり、「創始ノ業」云々の文章は『帝國大学第6年報』(明治24年)にも載っている。  
160) p. 41  
161) p. 155  
162) 大学名・学部名の変遷を確認しておくと、大学名は、「帝國大学→東京帝國大学→東京大学」とかわり、分科大學は学部になって、「工科大学→工学部→第一工学部→工学部」とかわり、現在は東京大学工学部である。  
163) 教育法規と教育内容の変化についてはふれないが、たとえば次のものが詳しい。国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第3～6巻(学校教育), 教育研究振興会, 1974年。日本科学史学会編『日本科学技術史大系』第8～10巻(教育), 第一法規出版, 1964年。  
164) 明治42年に早稲田大学理工科が創設されているが、同校は私立なのでこの時は専門学校令によっている(校名は大学)。  
165) 『文部省第73年報』(昭和20年)所載のもの。東京帝國大学は工学部が2つだが1校に数えた。なおこの校数は、いわゆる「内地」で文部省の管轄下にあるものの数であり、いわゆる「外地」には官立の旅順工科大学・台北帝國大学工学部・京城帝國大学理工学部があった。  
166) 注153を参照いただきたい。  
167) 『東京大学百年史・通史2』p. 260—261, 369—374  
168) 小倉金之助「数学者の回想」小倉『...数学者の回想』筑摩書房, 昭和42年, p. 45  
169) 同上 p. 46  
170) 荒川文六「恩師の面影」東京大学電気工学科同窓会編『東大電気工学科の生い立ち』(諸先生のおもかげ・第1集)オーム社印行, 昭和34年, p. 28  
171) 潤藤象二「大正初期の教官室、図書室、実験室」同上書, p. 104—105。引用文にある事務室は、図書室の事務室という意味と思う。  
172) 三好晋六郎「我大学ニ於ケル造船学」付図『造船協会会報』第2号, 明治37年, p. 16—17の間の折込図。次の文献に複製版が掲載されている。『船舶工学科の百年』東京大学工学部船舶工学科, 昭和58年, p. 92  
173) 注172の三好文(講演)『造船協会会報』第2号 p. 15。または『船舶工学科の百年』p. 90  
174) 東京帝國大学工科大学機械工学科教室・工学実験室『機械工学科・工学実験所・報告 第二、第三』(從明治44年9

### 滝沢：工部大学校書房の研究(3)

- 月至大正2年8月)の「第二」(從明治44年9月至大正元年8月) p. 3  
同報告は「第二」と「第三」で1冊になっている。(ページ付けは通し)。なお、「第一」は未見。「第四」以降については不詳。  
175) 同上書の「第三」(從大正元年9月至大正2年8月)p. 21  
176) 同上「第三」p. 25  
177) 山内不二雄「工科大学機械工学科、学科課程に就て」のあとの「質疑及び評論」での山内不二雄助教授(当時)の発言。『機械学会雑誌』第7号, 大正3年2月, p. 43  
178) 明治42年7月土木工学科卒業記念の写真集に掲載。写真集では「土木図書館」となっている。  
179) p. 386—387の間の折込表。なお、本文のこの前後で(旧)帝國大学の工学部だけを問題にしているのは、資料上の理由だけによるものであることを念のため付記しておく。  
180) 今岡和彦『東京大学第二工学部』講談社, 1987年, p. 10  
181) 東京大学生産技術研究所編・発行『東京大学第二工学部史』昭和43年, p. 30, ほかにp. 32  
182) 同上書 p. 123  
183) 近年の東大工学部の各図書室の様子は、東京大学附属図書館月報『図書館の窓』の次の号の「学内図書館めぐり」に出ている。Vol. 18 No. 2, 3, 5—12(1979年), Vol. 19 No. 1, 2, 8 (1980年)  
184) 『内閣文庫洋書分類目録 英書篇』上・下、国立公文書館内閣文庫, 昭和47—48年。『内閣文庫洋書分類目録 佛書篇』、内閣文庫、昭和43年。  
185) 東京大学教養学部図書館所蔵の工部大学校旧蔵の洋書の標題紙の写真(工部大学校と第一高等中学校の印がある)が、原正敏「明治初期の図書教育(I I)・工部大学校を中心」に掲載されている。『図書研究』第8号、昭和46年, p. 29  
186) 『第一高等学校六十年史』p. 350。もっとも、蔵書の一部が整理されたこともあったようである。工部大学校で教科書として使用されたと思われるコリアーの英文学史が、一高(第一高等中学校?)で(おそらく重複のために)整理され、それを英文学者の平田禿木と上田敏が(東京)帝大前の古書店で購入したという。禿木の所蔵になった本には工部大学校と一高(第一高等中学校?)の蔵書印、それに「第一高等中学校消印」が押されているという。以上のことは禿木が福原麟太郎(英文学者)に宛てた昭和8年の書簡に書かれている(小川利夫「平田禿木から福原麟太郎への手紙」7, 『学鎧』第80巻8号, 1983年8月, p. 30—31)。  
187) この例は、注133にあげた「日本の機械工学の開拓者・井口在屋(1)」にあるものを踏襲している(p. 62の注34)。  
188) くわしくは注67を参照していただきたい。  
189) 「工部大学校跡」記念塔碑文(あとの注198を参照)。および、宮尾しげを監修『東京名所図会・麹町区之部』、睦書房、昭和44年, p. 115—116。  
190) ただしこれらの機関がすべて本館と濠に面した建物

- (博物場)を使用したわけではない。たとえば東京女学館が校舎としたのは工部大学校の生徒館である(東京女学館百年史編集室編『東京女学館史料』第1集～第5集、昭和54～58年)。
- 191) 『明治工業史・建築篇』工学会、昭和2年(複製版が、学术文献普及会、昭和43年) p. 142
- 192) 例えは版画家の織田一麿が、著書『武蔵野の記録』のなかに収録した素描に、「虎の門旧工部大学跡」(明治40年)と「旧工部大学跡」(大正8年)がある(巻頭図版の第4図と第20図、説明文はp. 383)。武蔵野郷土史刊行会、昭和57年(昭和19年の洗林堂版の復刻)。未見だが山下兼秀の油彩画「工部大跡」というのもあるようである(鹿児島市立美術館蔵)。また小説家の志賀直哉の回想に「僕が七つの時、入学した虎の門の学習院が煉瓦づくりで、工部大学のあとだと後に知った」云々とある(『稻村雑談・家のこと』志賀直哉全集 第8巻 岩波書店、昭和49年、p. 47)。
- 193) 『荷風全集 第13巻』岩波書店、昭和38年、p. 324
- 194) 『建築世界』第17巻第3、4号、大正12年3、4月
- 195) 同上 3号(3月), p. 51
- 196) 是澤恭三「工部大学の跡」『明治村通信』第92号、昭和53年2月、p. 833～834。『東京国立博物館百年史』同館編、第一法規出版、昭和48年、p. 282～283。
- 197) 『麹町区史』東京市麹町区役所、昭和10年、p. 1106～1107。『会計検査院百年史』昭和55年、p. 344。
- 198) 「工部大学校跡」記念塔の最初の建設場所は現在ある場所とはすこし異なる(日本工学会創立100周年記念事業実行委員会編『我が国工学100年の歩みと展望』日本工学会、昭和54年、p. 282)。注189にあげた碑文の全文は次のものに載っている。菊池重郎「工部大学校百年(中)」『明治村通信』第91号、昭和53年1月、p. 826。上田弘之『日本工業の黎明』国際電信電話株式会社編・発行、昭和56年、p. 258～259。

### 〈追記〉

「書房について」の最後に工部美術学校についてふれたが、工部美術学校旧蔵書の一部が、明治美術研究学会事務局編『工部美術学校旧蔵図書仮目録』(同学会発行、昭和61年、65p)に収録されている。同仮目録が収録している工部美術学校の旧蔵の洋書(伊・仏・英)の実物には、次の印などによって、蔵書であることが示されている。(印は縦書きで、斜線のところで行が変わる)。

1. 「工学寮美術 / 教場図書印」縦7.8cm×横4.7cm
2. 「工作局 / 美術校」縦3.3cm×横2.4cm
3. 朱筆で縦に「画教場」

また、表紙うらに次のような用紙が貼付されているものがある。(日本語は縦書き。本そのものはどれも洋書である。枠の線が、縦10.5cm×横7.5cm。用紙の大きさ、縦

12.5cm×横9.5cm)。

人名 モゼス氏著  
書名 古代陶器抜翠  
番号 第三十号  
冊数 壱冊全

Numer 30.

Number 1.

工学寮・工部大学校の印や蔵書票が一緒にみられることはないので、工部美術学校の蔵書は工学の方とは管理が(利用も)別個だったように思われる。

また、以上とは全く別のことだが、明治7年の工部省布達第6号(明治7年2月20日)には『工学寮学課並諸規則』の全文が別冊として付載されている。(東京大学史料編纂所蔵の『工部省布達』による)。この別冊は全体が通し番号の条になっているなどの点では、単行冊子の明治7年の『工学寮学課並諸規則』と同じである。しかし「章」は全部で20あり、最後の条は第88条である(書房は第58～66条)。形式と内容の点で、単行冊子の明治7年と8年6月改正の『工学寮学課並諸規則』の中間的なもののわけで、これについては小稿を書いている時点では気がつかなかった。書房の部分では、第64条(単行冊子の明治7年では第63条にあたる条)に、単行冊子の7年にはない工学寮官員の図書借覧のことが付記されている。この付記の部分は(内容が変更の上で)単行冊子の8年6月で節として独立することになる。